西南学院大学神学部主催　公開シンポジウム　報告資料

「クィア神学」は何をするのか

── 教会と異性愛主義 ──

藤　方　玲　衣

2024/12/6　17：30～19：30
@西南学院大学中央キャンパス　１号館４階　１－409教室　／
オンラインハイブリッド開催

※本稿は，上記の概要で開催された神学部公開シンポジウムの報告資料である。多様な面で変革期を迎えつつあるこんにちのキリスト教神学及びキリスト教会における異性愛主義，性別二元論，家父長制を問い，伝統的な神学の在りかたをも問うことを目的に据え，神学部は当シンポジウムを開催した。神学の営為に対する神学部の寄与として，『神学論集』において報告する。学術領域及び現場からの意気軒昂な発題の記録として，広く共有されることを願う次第である。

タイムテーブル

17：30～17：40　開会挨拶・登壇者紹介・注意事項の説明
司会者：才藤千津子 さん

17：40～18：15
講演１　「「クィア」と「神学」の結び方」　工藤万里江 さん

18：15～18：50
講演２　「日本社会と〈クィア神学〉の文脈化
──「国家と教会」論・再考 ──」　堀江　有里 さん

〈休憩５分〉

18：55～19：05	応答１	藤方　玲衣さん
19：05～19：15	応答２	広木　　愛さん
19：15～19：30	質疑応答	
19：30	閉会挨拶	司会者：才藤千津子さん

シンポジウムにおけるルール

- ジェンダー・セクシュアリティなどについて，名前や見た目，印象に基づいて決めつけたり，否定したり，自分の立場を前提にした主張をしない
- 他人のジェンダー／セクシュアリティを尋ねない
- 他人の個人情報や経験を，当人の意向を無視して外部に漏らさない
- 会場での撮影や録音は禁止。オンラインの映像についても同様
- これらを守らない発言及び行為を繰り返すなどした場合，退室を求める可能性あり
- この会場にいるすべてのひとが安心して参加できる環境をつくる

講　師

- 工藤万里江（くどう・まりえ）さん
  大学非常勤講師（専門はキリスト教とジェンダー／セクシュアリティ）。主著に『クィア神学の挑戦 ── クィア，フェミニズム，キリスト教』（新教出版社，2022年）。
  メッセージ：クィア神学は，教会・神学に巣食う異性愛主義に抵抗してきた人々の歩みの一端です。そこで用いられてきた「クィア」とはどのような視座なのか，それを「神学」と結び合わせるとはどういうことなのか ── 多様な試みから紐解いてみたいと思います。

• 堀江　有里（ほりえ・ゆり）さん

日本基督教団牧師（京都教区巡回教師），信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）代表，大学非常勤講師（社会学，ジェンダー論など）。

主著に『「レズビアン」という生き方 ── キリスト教の異性愛主義を問う』（新教出版社，2006年），『レズビアン・アイデンティティーズ』（洛北出版，2015年），共編著に『クィア・スタディーズをひらく』第１～３巻（晃洋書房，2019-2023年）。

メッセージ：教会には性差別が存在することを多くの女性たちが指摘してきました。同時に教会は異性愛主義を持ち続けていることも指摘されてきました。誰かのいのちを踏みつけて，あるいは奪いながら，育まれる「信仰」とは何か。日本社会でキリスト者として「神学する」とはどのような可能性があるのか。ご一緒に考えたいと思っています。

応答者

• 広木　　愛（ひろき・あい）さん

バプテスト野方キリスト教会牧師。

著作「ベツレヘムで嘆き悲しむ声がした」（越川弘英編『クリスマスへの旅路　アドヴェントからエピファニーへ　新版・教会暦による説教集』〈キリスト新聞社，2020年〉所収）

メッセージ：新約聖書の「宿屋」のようにすべての人が受け入れられるところが教会だと思って，聖書を読みたいと思っています。これまでうまく言葉にできなかったところを，少しでも言葉化できるようなヒントをいただけたらと思っています。

• 藤方　玲衣（ふじかた・れい）さん

西南学院大学神学部専任講師。主な関心領域はヘブライ語聖書学。講義「キリスト教文学」やジェンダー問題，パレスチナ問題にかんする公開講座なども担当し，最近 *The Queer Bible Commentary* の翻訳にもかかわ

り始めました。

メッセージ：「ヨブ記」と出会い，聖書の物語群に魅了され続けてきました。第二神殿期からこのかた，多彩な思想の源泉となってきたヘブライ語聖書は，制御不可能な神の自由と希望を語っています。人間の構築物である権威や規範を問い返す力に満ちた物語群としての聖書と，クィア神学とは同じ視座を持つと考えているところです。

シンポジウム発言記録

開会の挨拶

司会　才藤千津子 さん

本日はハイブリッドで開催しております。オンラインでご覧になっている皆さまに対しても歓迎のご挨拶を差し上げます。

本日司会をさせて頂きます，西南学院大学神学部長の才藤千津子でございます。宜しくお願いいたします。これより，西南学院大学神学部主催2024年度シンポジウム「「クィア神学」は何をするのか ── 教会と異性愛主義」を開始いたします。さて，本日のシンポジウムですが，私どもでは，キリスト教会のなかにある異性愛主義，性別二元論，家父長制に問いを投げかけ，ひいては，伝統的な神学の在りかたをも問うことを目的としております。私たちの世界も，教会も，現在，大きな変化の中にあります。教会も神学も，従来の在りかたが厳しく問われております。色々な意味で，危機の時代でありますが，また，新しい萌芽が生まれてくることが期待される時代だとも言えるかもしれません。本日のシンポジウムは，そのような中で，キリスト教神学に新しい地平を拓こうとする試みのひとつだと考えております。なお，学校法人西南学院では，2023年に「多様性を認め合う学院づくりに向けた宣言～西南学院ダイバーシティ　エクイティ＆インクルージョン推進宣言～」が出されました。その内容は，西南学院のホームページに掲載されておりますのでご参照ください。

講演１：　工藤万里江 さん　「「クィア」と「神学」の結び方」

はじめに

みなさんこんばんは。オンラインでご参加いただいている方々も有難うございます。

最初の講演を担当させていただきます，工藤万里江と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私自身のタイトルは，「クィアと神学の結び方」というかたちにさせていただきました。ただですね，本日のシンポジウムのタイトル自体は，「クィア神学は何をするのか ── 教会と異性愛主義」というタイトルになっています。まず，初めにとして，このことにちょっと触れたいと思うのですけれども，なぜ，「クィア神学とは何か」ではなく「クィア神学は何をするのか」にしたのか，というところですね。このタイトル自体は，堀江さん，応答者の方々も含め，みんなで決めたものなので，それぞれの想いがもしかしたら，違うかもしれないのですけれども…。私自身としては，「何をするのか」という問いにしたところにはこだわりがあります。それは，端的に言えば，「クィア神学」というものを固定された学問体系や思想としてではなく，むしろ常に動き続ける，「動的なもの」として捉えたいと思っているからです。

さらに「クィア」と「神学」とを分解して述べますと，まず「クィア」の部分において，そもそも「クィア」という言葉が，非常に動的で定義を拒むような営みを指すという理由があります。そのために，当然のことですけれども，「クィア神学」もまた必然的にひとつの枠組みには決して押し込めて語ることができないものと言えます。これは固定され得ない営みで，その中では本当に多様な試みがなされています。なので，その多様性ひとつをとってもなかなか「クィア神学とはこれなんです」と断定して説明することが難しい。ただ同時に，その多様な試みが「何をしようとしているのか」，「何を目的にしているのか」という部分においては，私自身は，きちんと共通の視座を持っていると思っているので，その意味で「クィア神学とは何か」よりも「何をするのか」という問いの立て方のほうが相応しいのではないかと感

じています。そしてもうひとつ,「神学」の部分にかんしても，それを私としては，より動的なものと捉えていきたいという思いが常にあります。「神学」はしばしば,「実践」と対照的に語られる，と思います。つまり，実践が教会やキリスト教教育や運動（アクティビズム）の場においてなされる多様な動的営みであるのに対して，神学というと，何かしら固定されて整然と組織立てられた学問体系である，という捉え方がかなり一般的になされていると思うのですね。だからこそ，実践と神学の乖離ということもずっと指摘されてきているわけです。そして実際に「神学」の構築に携わってきた人々こそ，実は，そうした整然と固定された学問体系を作ろうとしてきたのではないか，と私はみています。しかもそれらの人々は，何かしらの特権を持った,「偉い」人であって，だからこそこの「神学」というものに「権威」が付されると。しかしその「神学」とは本当にそういうものなのだろうか？という問い，この神学を規定して「権威」を付しているのは誰なのか？　さらに言えば，その主体になることができるとされているのは誰で，なることができないとされているのは誰なのか？　そこにどのような権力がかかわっているのか？　この「神学」というものの営み自体も問う…そこまで問うのが「クィア神学」の挑戦のひとつでもあると思っています。その意味で,「何か」ではなくて「何をするのか」という問いもまた,「クィア神学」の根幹にかかわるような問立てなのかな，と思います。

こうしたことを前提にしつつ,「ではいったいクィア神学は何をしようとしているのか」，そのためにどのような方法がとられてきているのか，ということをご紹介できればと思っています。その際,「クィア神学」のなかにみられる二つの方向性をみるという方法をとることで，少しでもわかりやすく提示できればと思います。

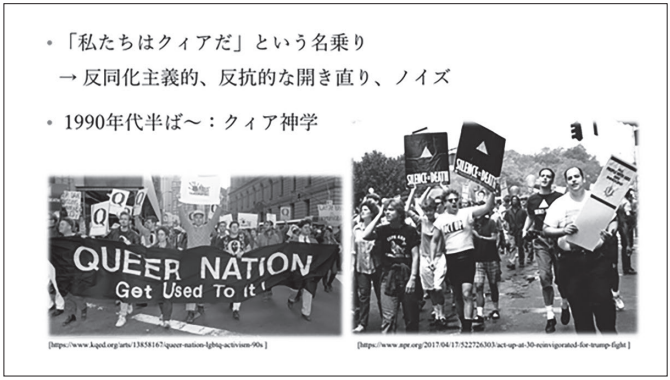
そこでまず,「クィア」という言葉の出現背景と，そこに込められた思いを確認しておきたいと思います。

1．名乗りとしての「クィア」

「クィア」という言葉は，── すでに私は繰り返し使ってしまっていますけれども ──，元々は「奇妙な，普通ではない」という意味を持つ言葉で，長い間，特にゲイ男性に向けた非常な蔑称，差別用語として使われていました。日本語で言えば，「この変態，オカマ！」というような感じで，投げつけられていた言葉なわけですね。しかし1980年代に，米国を中心に起こったエイズ危機をきっかけに，この言葉を向けられていた人々がそれを取り返して，自称として使い始めました。これはどういうことなのか，と言いますと…。

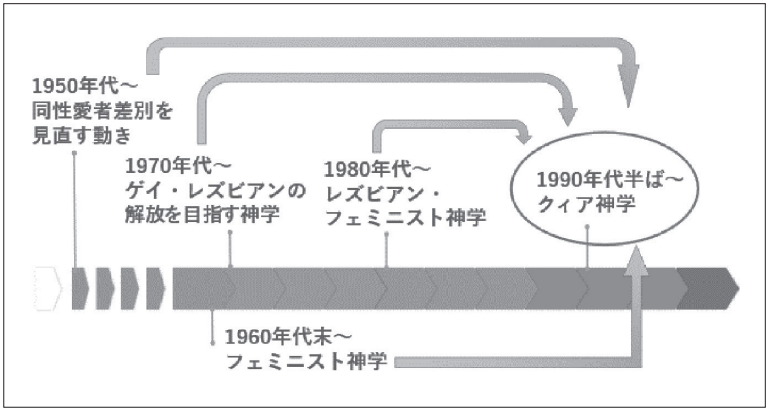
1980年代に，米国を中心に HIV ウイルス/エイズが爆発的な広がりを見せ，当時は良い治療薬がなかったこともあって，死に直結する病だと言われ，現実的に多数の死者を出しました。しかも当初，HIV ウイルス/エイズが，ゲイ男性のコミュニティを中心に広がったことから，「エイズはゲイの病である」と，さらには，このエイズというのは，同性愛という罪をおかしている人々を罰するために神が与えた罰だ，というひどい差別的な言説まで流布していました。こうした差別的な言説を支えていたエージェンシーのひとつが，キリスト教会であるわけですが，もちろん，ウイルスは人の性的指向を選んで感染してくるわけではないので，これはまさに人々の同性愛嫌悪と深く結びついたものでした。さらに，HIV/エイズの被害を特にひどく被ったのはゲイ男性のコミュニティだけではなくて，セックスワーカーや静脈注射による薬物の使用者などで，こうした人々はすでに社会の周縁にいたために，米国政府も製薬会社もまともな対策に乗り出さない。そういうかたちで，人々は文字通り見殺しにされていたわけです。

このような状況の中で，人々はなんとか生き延びるために，まず少しでも感染者を抑え死者を減らすことを目指して運動体として連帯し，国や製薬会社に抗議をすると共に，より感染を起こしにくい，セーファーなセックスの啓発にも取り掛かっていました。その時に連帯と抵抗の視座として使われたのが，もともと差別的な名指しとして機能していた「クィア」という言葉なのですね。これを，彼ら／彼女らは，今度は名乗りとして自称として使い始



めたわけです。このとき，これを自称として使った人々の意図というのは，けして卑下ではないですね。むしろその反対，すなわち自分達をそのように名指してくる主流社会に対する徹底的な抵抗とプライドを示すところにありました。「ああそうだ，私たちはクィアだ，変態だ。それの何が悪いんだ」と。「むしろそのように人を名指してくる，そして殺している…そちら側の規範，差別を問うべきではないのか」という姿勢が，その名乗りには込められていたわけです。つまり名乗りとしての「クィア」は，反同化主義的な抵抗姿勢を鮮明にするために用いられていた。そしてそれは，既存の社会に対して「私たちを受け入れてくれ」とか「私たちも良い市民なのだ」とかお願いするような姿勢ではなく，非常に反抗的に開き直って，主流社会の差別的構造を告発するノイズとして，そこに堂々と名乗りをあげるという姿勢を持つことを意味していました。つまり名乗りとしての「クィア」というのは，社会の大多数の人にとってものすごく不愉快で，自分たちの特権を揺るがされるような脅威となるわけです。

そして1980年代のクィア・アクティビズム，1990年代からのクィア理論やスタディーズの影響を受けて，それを「神学」と結ぼうとする動きが出てくるのが1990年代に入ってからです。それが「クィア神学」と呼ばれるものとなります。なので，「クィア神学」というもの自体は1980年代以降のアクティビズムやスタディーズを受けたものなので，名称自体は1990年代半ばか



ら出てくるわけです。しかしそもそも，クィア・アクティビズム，あるいはスタディーズ自体は，それ以前からのゲイ・レズビアン解放運動がなければ存在しなかったことと，クィア・アクティビズム，クィア理論はともに，フェミニズムとの非常に深い相関関係の中で立ち上ってきたことを考えると，当然クィア神学もまた，これらとの連続性で見ていく必要があります。キリスト教の内部では，確認できるところでは古くは1950年代から，同性愛差別を自己批判しようとする動きがありましたし，それから70年代，80年代とレズビアンやゲイの解放を目指す神学が紡がれてきました。さらに1960年代末からのフェミニスト神学，さらに重要なものとしてレズビアン・フェミニスト神学等々の流れもあるのですね。つまり，これらがすべて絡み合って，互いに刺激し合いながらクィア神学の流れを作っていると言えます。

２．クィア＋神学＝？

では，２に移ります。それでは，そもそもクィア神学とは何を目指しているのか。実際にどのような試みがなされているのか，というところに話を移していきたいと思います。先ほど私は，「クィア神学」というのは非常に多様な試みが含まれているので定義が難しいけれども，目的の部分ではひとつ共通の視座を持っているとお話をしました。ではそれは何か？　といえば，

私自身の理解では，「クィア神学」というのは第一義的に，キリスト教に巣食う異性愛主義と，それと不可避に絡み合う家父長制，これらに抵抗するという目的があると考えています。具体的には，キリスト教会・神学の女性差別や性的マイノリティ差別を告発し，人を殺すのではなく生かすキリスト教を探す。それがクィア神学だ，と，私自身は理解しています。しかし，その目的に到達するために「クィア」と「神学」をどのように結ぶか，という部分にかんしては，大きく分けて二つの方向性があるのではないかとみています。それが以下の二つです。ひとつは，「本当の」キリスト教を探す立場，そしてもうひとつは，「キリスト教／神学」の枠組み自体 ── その構築性と権威 ── を問うという立場です。これらをひとつずつみていきたいと思います。

2-1.「本当の」キリスト教を探す

まず第一の「本当の」キリスト教を探す，という立場は，いわばクィア神学においてメインというか「主流」の立ち位置であると言えると思います。これは，自分たちが信じるキリスト教は女性差別や性的マイノリティ差別を推し進めるものではなくて，むしろそれに反対する信仰体系である，という信仰を前提にして，キリスト教内部の異性愛主義的な言説にひとつひとつ反論していこうとする試みであるといえると思います。

その試みは，当然様々な分野にわたってする必要があるのですけれども，最も端的なものとしてまず，聖書解釈が挙げられます。皆さまご存じのように，キリスト教では長い間「同性愛は罪である，それは聖書に書いてある」ということを言い続ける人たちがとてもたくさんいます。その意味で，性的マイノリティと女性の人権を擁護しようとする立場の人たちは，まず何を措いても聖書解釈に着手せざるを得ませんでした。「同性愛は罪だ，聖書に書いてある」と言われるときに，根拠として使われている箇所はだいたいこの６箇所くらいなんですね（pp 参照）。今日はひとつひとつを取り上げることはしませんけれども，端的に言えば，聖書の膨大な文書の中でたった６箇所だけ，というのはとても少ないなあ，と個人的には思います。それから，も

◆ **根拠とされる聖書箇所**

① 創世記1:27-28, 2:24など（創造物語）
② 創世記19:1-29（ソドムの物語）
③ レビ記18:22, 20:13（神聖法集）
④ ローマの信徒への手紙1:26-27（「自然に反する」関係）
⑤ コリントの信徒への手紙Ⅰ6:9（「男色をする者」は神の国を受け継ぐことはできない）
⑥ テモテへの手紙Ⅰ1:8-11（「男色をする者」は健全な教えに反する）

し，キリスト教というものが，ナザレのイエスを中心点とする信仰であるとするならば，イエス自身の言葉はこの６箇所のなかには無い，ということも付け加えておきたいと思います。さらに，そもそも「同性愛」とか「セクシュアリティ」とか「セクシュアルオリエンテーション（性的指向）」といった概念自体が19世紀末 ── 近代 ── に初めて出てきたことを考えれば，ずっとずっと昔に書かれ，紡がれてきた聖書の時代には，現代の私たちが共有している概念自体が共有されていないとも言えるわけです。シンプルに言い換えてしまうと，聖書というものは，「同性愛」というものにかんすることは何も言っていない，とも言えるわけですね。こういった前提も共有しつつ，フェミニストやクィア視点の聖書学からは，これら６箇所の丁寧な分析作業が行われておりまして，端的に言ってどれも「同性愛は罪」との根拠にはできないとの反論がなされてきています。参考文献としていくつかの本を挙げておきました（山口里子『虹は私たちの間に ── 性と生の正義に向けて』（新教出版社，2008年）；小林昭博『同性愛と新約聖書』（風塵社，2021年）など）。

聖書解釈における反論と同時に進められてきたのが，「教義学」分野での見直しです。神論，キリスト論，聖霊論，罪論，終末論，教会論等々と言った様々な神学的なテーマにおいて，従来のそれらがいかにキリスト教の異性愛主義や家父長制を前提に作り上げられてきてしまったかを批判しながら，むしろそれらに抵抗しうるものとしてそれら ── 神や聖霊やキリストといっ

たもの ── を読み替える作業がずっと続けられてきています。

例えば，キリスト論ですね。このなかでいちばんよくなされているのが，人間イエスに注目する立場であると思います。つまり，超越的な存在としてのイエス・キリストではなくて，むしろ2000年前のパレスチナに生きた一人のユダヤ人男性として，人間イエスに注目をすると。そこでは，例えば聖書の記述からイエスの情熱的な活動に焦点を当てて，それがいかに周縁化されている人々を解放するためのものであったかに注目をすることがよく行われます。

そもそもイエスは十字架刑で死刑になったわけですが，この刑罰は当時ユダヤを支配していたローマ帝国において，政治犯たちが処される刑だったとも言われている。つまりイエスという人は，明らかに政治的に危険な人物であった。それは，体制側から見れば，既存の秩序を転覆させようとする人物だったと。しかも聖書を読むと，彼は一貫して貧しい人々や，セックスワーカーや，徴税人といったような，当時の社会で忌み嫌われていた人々をこそ重視して，共に働こうとしている。さらに，彼が伝えた「神の国」というメッセージは，まさに既存の社会秩序とはまったく違う社会のビジョンを示すものであったと。これらのことから，クィア神学の中では，イエスこそ，現代でいうクィア・アクティビストと言えるのではないか，という熱いキリスト論も語られてきたわけです。

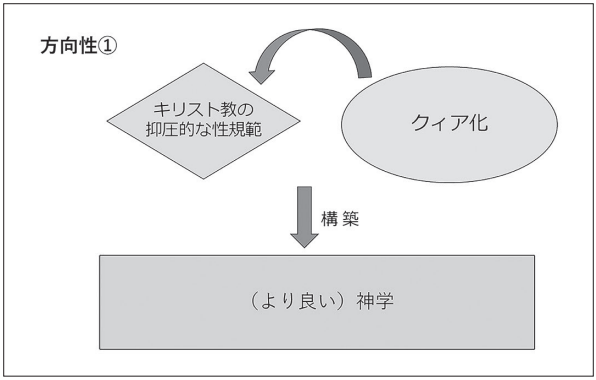
さらにクィア神学の中では，聖書解釈や教義の見直しに加えて，キリスト教の性倫理の見直しも行われてきました。いわゆる保守的な ── 伝統的な ── キリスト教の性倫理には男女二元論に基づいて，そこに優劣関係がつけられ，生殖を前提とした，モノガミーの婚姻関係における性行為のみを是とするもの（異性愛主義や生殖中心主義）がみられるのですが，こうした性倫理においては女性や性的マイノリティが「罪人」の立ち位置に置かれ続けてしまうわけですね。だからこそ，それらに代わるキリスト教性倫理が必要だ，と考える多くのクィア神学者が，さまざまな新しい「基準」を提案してきました。そこではたとえば異性間のヒエラルキー的な支配・被支配関係を超えうるモデルとして，「友情」が非常に有用なのではないか，と再評価さ

れたり，あるいは，平等に力づけ合う「相互性」こそが倫理の軸となるべきではないのかと言われたり，あるいは，「ホスピタリティ」すなわち他者に対するオープンな心，親切なもてなしの心があるかどうか，それだけが新しい性倫理の基準となるべきではないのか，という主張もなされてきました。

このように，クィア神学の第一の方向性としては，聖書解釈や教義，性倫理などを検討し直すことで，いわば「本当の」キリスト教のメッセージとはむしろ異性愛主義の反対側であって，それに抵抗するものである，その意味で，なんならキリスト教こそまさにクィアなのだということが繰り返し主張されてきました。

この第一の方向性において「クィア」と神学はどのように結ばれているかということをみてみますと，「クィア」は，キリスト教の抑圧的な性規範の部分にのみかかっていると言えます。つまり，間違って作られ，語られてきたキリスト教の抑圧的な性規範の部分に対して抵抗し，それを批判していく。このようにして，新しいかたちでの規範的なものをつくることで，さらにより良い「神学」の構築を目指していくと。これが第一の方向性です。

言い換えれば，第一の方向性においては，いわば従来型の「神学」といいますか，「従うべき正しい規範」としての「神学」というものが追い求められている。その意味で，従来のかたちというのは踏襲されているわけですね。それを少なくとも「より良い」ものにしよう，「より包含的なもの」にしていこうとしているのではないかと思います。



もちろん，差別との闘いにおいて，こうした「より良い規範」を差し出そうとする試みがいかに必要なものか，人のいのちが奪われた現実に対して，いかに切実なものであることはよくわかります。しかし一方で，この第一の方向性においては「キリスト教」というもの自体，あるいは「神学」自体の構築性や，そこに付随している権威の問題に，なかなか十分に切り込めていないのではないか，という問いが立ち上がってくるんですね。ある意味で，これらの試みというのは，自分たちも「良いキリスト者」なのだ，として，そこに組み込まれることを望むような姿勢がみられるとも言える。こうした主張は，本当の意味でのノイズになり得ているのだろうか。主流の人たちに眉を顰められ，脅威とみなされるほどの「抵抗」となり得ているのだろうか…そんな問いがクィア神学の内部でも立ち上がってきたわけです。

2-2. キリスト教／神学そのものの構築性と権威を問う

こうしたことを念頭に置いた第二の方向性が，クィア神学の中に見出せるもうひとつの方向性です。そこにおいては，より根本的に「キリスト教」あるいは「神学」として語られてきたもの自体を再考しようとする試みがなされてきています。

実は，こうした方向をとるクィア神学者はまだそれほど多くないと ── 私の研究からは ── 思うのですが，今日はその一人であるマルセラ・アルトハウス＝リードという神学者を紹介したいと思います。彼女はアルゼンチン出身で，スコットランドで神学の教鞭をとった人です。専門はラテンアメリカ解放の神学，フェミニスト神学，クィア神学などでした。

今日ご参加の皆さまはよくご存じかもしれないと思いますが，ラテンアメリカ解放の神学とは，1960年代を中心として，ラテンアメリカ諸国のキリスト教徒の共同体から起こってきた実践的な神学ですね。もともとスペインやポルトガルなどのキリスト教国が持ち込んできたキリスト教が，西洋帝国主義に染まっていること，そして今もなおグローバルな資本主義構造を支えていることを批判した神学でした。アルトハウス＝リードはこの解放の神学の視座を強く持っていた，つまり，植民地主義に対する批判をもともととても

強く持っていた神学者なのですね。

その上で彼女は，ラテンアメリカ解放の神学の視座には欠けているものがあると言います。それは，西洋キリスト教の植民地主義的な性格と，それが強固に保持している性規範の関係性でした。アルトハウス＝リードによればラテンアメリカを植民地として支配するにあたって，キリスト教国が持ち込んできたキリスト教は，「どのような神を信じるべきか」ということだけではなく，むしろそれ以上に「どのような性的ふるまいをすべきか」というものだった。これを押し付ける…セクシュアリティの規制をすることが実は植民地支配の重要なポイントだったと，アルトハウス＝リードは分析しているのですね。そして現在でもラテンアメリカではこの非常にコロニアルな性規範に基づいて「男性性・女性性」とか「上品さ・下品さ」とか「適切さ・不適切さ」といったものが強い力を持って人々の人生を規制していると。だからこそ，植民地主義的なキリスト教に取り組むということは，異性愛主義的な性規範に取り組むことなんだとアルトハウス＝リードは考えたわけです。

つまりアルトハウス＝リードの中では，最初から「クィア神学」というものが，キリスト教の性規範にのみ取り組むということではなくて，そこから不可避に植民地主義の問題や資本主義の問題に取り組むということを意味していたと。まずこれが，彼女のユニークさでした。

そして，その視座から彼女が始めた「神学」は，先ほどご紹介した第一の方向性のように，「本当のキリスト教は良いものなのだ」ということを主張する方向性を一切取らないのですね。むしろ彼女は，「キリスト教」というものを永続的に相対化していく…それが人間の手によって構築されたものである，ということを示すような語りをし続けようとします。

たとえばイエスです。彼女は第一の立場の人たちがよくするように，イエスを「模範」や「モデル」として描き出すことはしません。むしろ彼女は，ラテンアメリカの女性たちと一緒に聖書の物語を読みながら，「イエスにはこういう限界があるよね」といったことをざっくばらんに語り合ったりもします。つまり彼女にとってイエスという存在はまったく特別な存在ではない。自分たちと同じ人間であって，しかも「究極的な模範」ですらなかった。そ

のことは，たとえば，以下のような文章からも分かります。“私たちがイエスの人生を読む時，殺された同性愛者について報じるタブロイド紙の記事を読むのと同じ目線で読まなければならない”，“イエスの情熱を現実の人々の人生の中に位置付けない限り，受肉の意味も，復活が暗示する身体の転覆の意味も理解することができない”からだ。

さらに，性倫理にかんしてもそうなのですね。彼女は，第一の方向性において紹介したような，今までの異性愛主義の代わりとなる新しいキリスト教性倫理のようなものを提示しようとは一切しません。こうした性倫理においては，たとえそこで使われる基準が新しいものになったとしても，結局今までと同じように「正しい在り方」と「正しくない在り方」の切り分けがなされてしまうと。アルトハウス＝リードはこういう「正しい在り方」を提示するのではなくて，むしろ，今まで「語るべきではない」とされてきたような「淫ら」で「下品な」経験や欲望の言語を使って，神やイエス，マリアといったキリスト教の宗教シンボルを語り直すということをしたりもします。

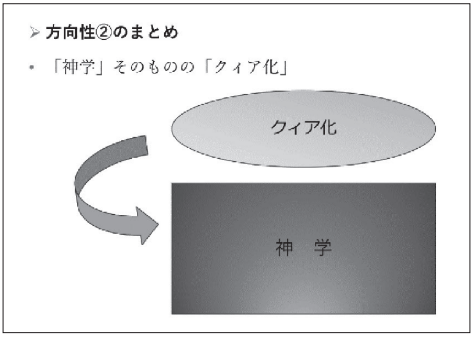
彼女のこうした姿勢からは，「宗教」というもの，「キリスト教」というもの自体への向き合い方に対する再考が促されているのではないか，と私は考えています。一般的には，「宗教」というものは，ある特定の信仰や世界の意味づけ，生き方の指針が既にそこにあり，信徒はそこに合わせて自らの生き方を振り返ったり，生き方を変えていこうとするものだ，と考えられています。つまり，上に確固たる思想や世界観のパッケージが既にあり，そこから人々は生きるための指針を読む，という方向性ですね。そして既存のキリスト教は，家父長制的で異性愛主義的で植民地主義的な思想を支える「神」をまさに下々のものに差し出してきて，それを受け入れるように，それを受け入れることこそが信仰なのだと教えてきました。

これに対してアルトハウス＝リードはまったく反対の方向性を取ろうとします。彼女は，すでに確立された教えや従うべき模範がまずキリスト教の側にあり，そこから自分たちの生を意味付けたり，何かを読み取ったりするという既存の順序を拒否するんですね。そうではなくて，何よりもまず，もう系統立てられない，普遍に落とし込めない，変わり続けるそれぞれの複雑な

生，人生から出発しよう，ということを彼女は言います。

そこにおいては，これまで既存のキリスト教においてほんの一部の特権者たちが握ってきた「神」や「キリスト」を語る資格を自分たちの手に取り戻す，ということが行われている。つまり，既存のキリスト教が「語るべきでない」としてきた人々が，「語るべきでない」とされてきたような身体や欲望や経験を通して神やキリストを語り，問うことが目指される。ここには一種の主体の転換があると思うのですね。アルトハウス＝リードは，「神学」とは，一人称で，自分の経験から，既存の神学言説の中では「下品」「淫ら」── indecent という言葉を彼女は使っています ── とされてきたような問いを立てて，神を探すことだ，と言います。それを語ったのが，2000年に出した“*Indecent Theology*”という本ですね。つまり彼女にとってクィア神学というのは，非常に不適切な，下品な神学のことを指していました。

この第二の方向性の特徴は，「クィア」という批判的で抵抗的な視座が，「神学」という営みそのものにかかっているというところだと私は分析しています。つまり，既存の「神学」というのは，キリスト教の「正しい教え」を提示するものであり，それを構築できるのはひと握りの特権を持った人々だった…。そしてそこには，異性愛主義と家父長制と植民地主義的な視座が深く埋め込まれてきたのに，そのことにすら気づかれないで，それが普遍の真理，あるいはすべての人が従うべき「正しさ」を示すものだとして提示されてきたのではないか。こうした「神学」の構築のされ方自体を問う。それ



が第二の方向性の試みだと言えるのですね。ここにおいて,「クィア」はキリスト教の一部としての抑圧的な性規範だけにかかるのではなくて，むしろキリスト教そのもの，神学そのものにかかってくる。そして，中からそれを揺るがし続けるということが，永続的に行われていく。それが目指すところは何か？　というところすら，明らかにならないようなかたちで，この内部からの揺るがし…ノイズに徹しているのが，いわば第二の方向性なのですね。ここにおいて問われているのは,「誰が神学をするのか」ということ自体です。それまで不適切とされてきた経験や主体から発せられるノイズとしての神語りですね。これは，異性愛主義への抵抗をしようと思ったときには性規範のみならずキリスト教や神学そのものに対して挑みかからなければいけない，という考察が前提になっています。

キリスト教の性規範は植民地主義や人種主義といったほかの差別的なイデオロギーと切り離されて存在しているのではなく，それらと不可避に絡み合っている，さらに言えば神学の在り方そのものと絡み合っているからです。それゆえ「クィア」な視座からキリスト教の異性愛主義に取り組むということは，既存のキリスト教の在り方，神学の在り方そのものに対する取り組みとなるのです。

まとめ

最後に,「おわりに」としてまとめたいと思います。

方向性の一と二にかんして，皆さまはそれぞれどうお考えになるでしょうか。もちろん，クィア神学の第一の方向性というのは，ある意味でとてもわかりやすいですよね。「本当の」キリスト教，あるいは「本当の」イエスはこうなのだ，と語ることは，キリスト教会のなかでは非常に説得力を持った言説ですし，その意味では具体的な変革につながりやすいという利点があると思います。しかし一方で，異性愛主義の根深さに切り込めるのだろうか？

そして,「キリスト教こそ本来は良いものなのだ」ということを言ってしまうがためについつい護教的になりがちという点が非常に大きな課題としてあります。

一方で，方向性の二は，端的にいって非常にわかりにくいですね。普遍的に適用されるような正しさを提示しようとしない，真理を主張しようとしない。一人一人の文脈から，今まで「語るべきでない」とされていたような主体が自由に語る。それを続けようとする。具体的な終着点も見えないわけです。しかしそれは，「構築」するのではなく揺るがすという意味でまさに，「ノイズ」であり続けるということ。これは，既存のカテゴリーにあてはめられない…揺るぎ続ける不安定な存在としてそこにいること自体を，抵抗の営為として見出すような方向性だと言えます。

そもそも立ち返れば，「神学」という言葉は原語のギリシア語では theologia（θεολογία）で，ギリシア語で「神」を意味する theos（Θεός, 'god'）と，「語り」を意味する logia（λογία, 'utterances, sayings, oracles'）をくっつけた言葉です。つまりそれは直訳すると「神語り」と言えるのではないか。「学」というよりも「神語り」。その原点に帰った時に，「theology」とは，人間の手によって作り上げられてきた既存のキリスト教の「正統性」という枠を越え出て，もっと自由で不遜で，思いつくままの「神語り」としても捉えうるのではないか。それを探す，ということにどのような可能性が見出だせるか…ということを色々考えたりもしています。

私の話はここまでにしたいと思います。有難うございました。

講演２：　堀江　有里 さん　「日本社会と〈クィア神学〉の文脈化 ──「国家と教会」論・再考 ──」

ただいまご紹介にあずかりました堀江有里と申します。宜しくお願いいたします。

最初才藤さんにご紹介いただいた通り，３年連続で西南学院大学に寄せていただくことになりました。おととしはコロナ禍で，オンライン開催でした。今回も貴重な機会を与えていただいて感謝いたします。オンラインでご参加の方々も有難うございます。

1．日本社会をクィアする神学とは？

私は，「クィア神学は何をするのか」ということを，日本の文脈で考えてみたいと思います。ただ，色んな切り口があると思いますが，今日は多少問題提起的なこと，実験的なことを ── この数年間語ってきていることではあるのですが ──，お話ししたいと思います。皆さんからご批判等頂ければ幸いです。

クィア神学は英語圏でその知見が蓄積されてきました。グローバルにいろんなことがらが進んでいるので，共通している部分（グローバルな部分）を踏まえると同時に，日本のローカルな部分に，クィア神学の知見をどのように当てはめて考えていくのか，分析していくのか，という課題があると思います。

クィア神学というのは，批評理論の分野で蓄積されてきたクィア理論の，神学への応用という考え方もできると思います。工藤さんがおっしゃった通り，多様なクィア神学の定義があって，あまり確定的な定義はできないと思うんですけれども，私自身はこういうふうに捉えている，ということでご紹介しておくと，「性規範を問うという神学的な営為」であるということです。

私の専門は社会学です。最近は大学の非常勤講師として，キリスト教学なども担当しています。私自身が神学を語る，というのは，自分のプロパーではないのに，すごく気が引けるな，という想いがずっとしてきました。ただ，神学というのは，「神にまつわる言葉の解釈」として，考えていきたいと思っています。そういう意味では，工藤さんが最後に，「神学っていったいなんだろう」ということで「神語り」とおっしゃっていました。そのあたりで，なにか，接点ができればいいなと思っています。

「クィア理論」がアメリカ合衆国で作られていった，ということは，文脈は，キリスト教文化圏なんですね。

なので，「クィア理論」とは必然的に，その文化，あるいは国家体制を問うという作業をしていくことになる。この文脈を踏まえると，「クィア神学」とは，「クィア理論」のキリスト教への応用，と先ほど述べましたが，「クィア神学」とはむしろ「クィア理論」への再応答なのではないかと私は

考えています。

ただ,「クィア・スタディーズ」という分野では，とくに私は社会学分野で研究していると感じることなのですが，日本に導入された時点で大きく欠如してきてしまったのが,「国民国家」という枠組みへの問い，日本社会という文化への問いではないかと思います。

２．現代の日本社会という文脈

2-1. 民主主義が壊れた時代に

日本の文脈で，どのように考えていったら良いのか。断片的になりますが，いくつか最近の状況をお話しておきます。今，私が危惧していることは，日本社会はもう，現実には民主主義が壊れている，ということです。

ひとつの例をご紹介します。2024年の９月11日の早朝，ふたりの人が逮捕されました。「茨城育樹祭ビラ弾圧事件」と呼んでいます。詳細は救援会のブログをご参照ください。そこに詳細が報告されています（https://ikuju-ibaraki.hatenablog.com）。いったいどういう事件かと言いますと，一年前の2023年に茨城県水戸市にある常盤大学 ── 大学名は報道されていないのですが ── に，育樹祭という問題を考えようとした人たちが，ビラをまきにいった。育樹祭というのは，皇室が出席します。かつて植樹祭を実施した場に訪れ，様子をみにいくわけです。そもそも，植樹祭とは,「緑を大切に」などというテーマで実施されていますが，実際には，森林を切り崩し，自然破壊したうえで行われる行事ですし，天皇や皇室の人たちが動く場合には過剰警備がなされ，市民の生活に大きな支障をきたすことになります。だからこそ，こういう行事自体，おかしいのではないかと考えるために学習会を企画した人たちがいました。かれらがいくつかの大学にも訪れ，学生たちと一緒にビラまきをしたということだそうです。先程，申し上げた通り，一年前（2023年）の秋の出来事です。そして，その出来事を理由に一年後に逮捕されたという事件です。形式的には大学が警察に被害届をだすというかたちで逮捕されるということになりました。今，大学名を述べましたが，じつは，逮捕されたふたりが実名報道された反面，大学名は出ていなかった。これが一体どういうこと

なのかな，と考えさせられます。とにかくこの二人は逮捕後に，10日間勾留され，すぐに更に10日間勾留延長が決定されました。

かれらの逮捕理由は「建造物侵入」でした。しかしながら，逮捕された人のお話によると，――ブログに紹介されていますが――勾留されてきたときの取り調べでは，「建造物侵入」については一切聞かれなかったそうです。問われたのは，「なぜ，あなたは，天皇制に反対するのか」ということばかりだった，と。お二人とも黙秘されていたそうですが，なぜ，逮捕されたのか，あきらかだと思います。「建造物侵入」は理由付けにすぎなかった。この国の国家体制である天皇制を問う，少なくともその問題を考えようとする人たちに対する「脅し」であると思います。

しかも，勾留理由開示公判が，のちに水戸簡易裁判所で行われましたが，ここでも「建造物侵入」には触れられず，また，なぜ勾留されたかについても「答えられない」と裁判長が言い続けるという不思議な裁判だったようです。お二人の証言が救援会のブログに掲載されていますが，今回，これらを読みながら，留置所での人権の不在ということについても考えさせられました。かれらはまだ「被疑者」です。起訴されていないからです。にもかかわらず，移動するときには，手錠をかけられ腰縄を付けられる。建物の中では向く方向が決められている。３畳ほどの房に入れられ，トイレには監視がつく。本は――留置所によって扱いが異なるそうですが――，前日に申請した３冊までしか入れられない。ボールペンは一緒には入れられない。大逆事件の大杉栄の時代には，一回監獄に入ったら一個言語を覚えるということにしていたそうですが，書くものがあるから覚えられるんですね。その時代よりもひどい状況になっている。天皇制に反対する，あるいは天皇制を公の場で考えるということ自体に弾圧とか忌避が起こって来ていることが，よくわかる事件でもありました。

これだけではなくて，2021年にはコロナ禍で延期されたうえに強行された東京五輪がありました。多くの人たちが海外からやってくる。感染拡大するのではないかと反対も多くありました。そして，実際に感染者は増加した。しかし，国際オリンピック委員会のマーク・アダムス広報部長は，「頻繁に

検査しているし，外部との接触を選手たちは断っているから，バブル方式を採用していてパラレル・ワールドなんだ」と発言しました。もちろん，「パラレル・ワールド」なんてつくりえていないし，だからこそ，感染拡大が起こったのです。ただ，この「パラレル・ワールド」というのは，言い得て妙だとも思います。というのも，先ほどご紹介した反天皇制の問題にしても，入国管理をめぐる外国人住民の置かれている問題にしても，また反基地運動の問題にしても，いろんなかたちで，私達は，「パラレル・ワールド」をつくらされているのではないか。入管施設に収容されている人たちも，また，仮放免で出てきている人たちも，県境をまたぐのに許可が必要だという状況です。移動する権利さえない。入管施設で色んな人権侵害が起こっているということもすでに私達は知っているわけですが，普段，それをいかほど意識しているか。多くの人たちにとって，遠い出来事なのではないか。そういう意味では，人々の分断が固定化されて，「選民と棄民」というのが作られている現状にあるのだと思います。そして，傍観者がつくられていく，というのがデフォルトになっている。こんな日本社会を，民主主義がある社会と言えるのだろうか，ということを考えさせられるわけです。これが現状の日本社会です。

2-2. 宗教と日本社会との共犯関係

ジェンダー・セクシュアリティのことがらにかんしては，法的な場面により明示的に現れている，宗教と日本社会の共犯関係があります。2022年に安倍晋三元首相が殺されてからようやく，旧統一協会の問題が社会問題となってきた。実際には勝共連合も1970年代から活動しているのですが，旧統一協会の問題は社会問題化しながらも，しかし，きちんと対処されてこなかった。2022年から大きな問題として取り上げられてきましたが，これもいつの間にかうやむやにされ，追及が立ち消えになってきています。この旧統一協会は，霊感商法などを用いた，反社会的な，ただの新宗教だとみなされてきましたが，実際には自民党との政策協定をしていて，提携をしていたということ。特に，旧統一協会にかんしては，家族主義と天皇制の復権，あるいは強化と

いうところで，家族政策に非常によくかかわっていた，というところが既に明らかになっています。

旧統一協会と政策をともにしてきたのが，神道政治連盟です。神道政治連盟は1969年につくられました。また，一緒に動いてきた団体として日本会議があります。日本会議の設立は1997年です。これらの右派の政治団体がどんどん台頭してきている，力を持ってきている，というのが安倍政権以降の日本の現状です。かれらの根幹にあるのは家族主義です。

神道政治連盟を例に取ると，家族主義を「神道」という宗教的な側面から主張するのは難しい。というのも，神道は，性にかかわるはっきりとした教義をもっていないからです。なので，男女一対を基盤とした家族主義を主張するために，便利なものを持って来た。それはキリスト教右派の利用でした。2022年に明らかになったことですが，楊尚眞（ヤン・サンジン）という牧師が神道政治連盟議員懇談会で発言をして，それが冊子にされたものがあります。楊尚眞さんは当時，弘前学院大学の教員，宗教主任でした。在日大韓基督教会の牧師でもあり，以前には，京都南部教会の牧師もされていました。この人が，講演で，アメリカ合衆国では未成年に対してはいくつかの州で禁止している「コンヴァージョン・セラピー（転向療法）」という心理療法を使って，同性愛者を洗脳して変えていくことを肯定する発言をしています。いわゆる「民間療法」というか，マインドコントロールのようなものです。こういうかたちで，公の場にキリスト教がかかわってきている，ということです。

キリスト教は日本社会ではマイノリティかも知れないですが，政権に資材を提出するかたちで，共犯関係をつくってきたことも忘れてはならないと思います。

では，このようなキリスト教の在り方は特殊なものなのでしょうか。逆に，果たして「正しいキリスト教」というのはずっと存在してきたのでしょうか。実際にはプロテスタント教会が入ってきた時期から天皇制国家に迎合してきた歴史があるし，天皇制とキリスト教会には権力構造の類似があると思います。今日はこの点にハンドアウトにありますが長くなるので割愛します。

※ハンドアウト抜粋（p. 2）

■権力構造の共通点・類似点
　• 教会が持つ権力構造：天皇制との共通点
　－「明治」期に入ってきたプロテスタント教会：
　→ 讃美歌，聖書などの翻訳，用語選択＝天皇用語との共通点
　－存在し続ける格差と権力構造
　信徒－教師，女性－男性，補教師－正教師，子ども－大人，社会的（経済的）地位，献金額の多寡
　地域，障がい，年齢，出自，性的指向・性自認，国籍・民族，ルーツ
　教会と性差別をめぐる諸問題
　＝女性のあいだの分断（家族，主任担任・担任，「牧師夫人」，「婦人会」的役割）
　女性の不可視性（性の多様性への“過剰な”配慮と統計の問題）
　－統合原理としての“人間を超えた存在”：その〈声〉を誰がどのように解釈するのか

3．発想の転換 ── キリスト教をクィアする

ここからはかなり実験的なことをお話させていただきます。

政治にかかわりながらも，日本社会ではキリスト教右派の影響はさほど大きくないようにも思えます。しかしながら，実際には，性的マイノリティにかかわるテーマで講演をしに行くと，キリスト教の集まりでは90％以上の確率で，「同性愛は罪だ」と言われたりすることがあります。「質問ではありません。感想です」ということでわざわざ来られて，そういうコメントを述べて帰られるかたもいらっしゃる。私は1994年に牧師になったのですけれども，その年に自分自身レズビアンとして表明し始めました。ものすごく葛藤しながら表明し始めたという立場です。当時，まだ自己受容できていないままでした（拙著，2006，『「レズビアン」という生き方 ── キリスト教の異性愛主義を問う』新教出版社，参照）。レズビアンであることを表明して講演することが多いのですが，それでもなお，「罪人だ」という言葉がやってくるわけです。これ結構えげつない話だと思います。目の前の人間を断罪しているということですから。ただ，30年たつと，慣れてしまう部分があるのです。「あ，また来たか」「あ，また来たか」というふうに思ってしまう部分もあります。もちろん色々へこむこともあるのですけれども…。ただ，サンドバッグのように，そのような言葉を自分自身がかけられていくということに，耐

えるだけでいいのか。私自身，相談業務にも従事していることから考えさせられるのは，私がその場を耐えたとしても，もし，自己肯定できていない性的マイノリティの人たちがそこにいたら，という想像力を忘れてはならないということです。私に向けられた言葉は，その人にも向けられているからです。

「同性愛は罪だ」と主張する人たちは「聖書に書いてある」とも主張する。そういう言葉が出てくるときに，「現在の聖書学の知見では，そもそもそんなことは書いていないですよね」とお伝えしたり，近代のものの考え方として「同性愛」や「性的マイノリティ」とか「性的指向」，「セクシュアリティ」というものが生まれてきているので，それを聖書という古代に記された文書に当てはめるのはおかしいんじゃないですか，ということを言ったりします。こういう際にちょっと奇妙な現象があります。「聖書に書いてある」と主張する人に「どこに書いてありますか？」とたずねると，だいたい答えが返ってきません。「そう聞いている」とか「教会でそう習った」という言葉が返ってくることのほうが多い。具体的な箇所をあげると，反論されるのがわかっているので言及しないのだろうと思います。

このような対話にもならない出来事に直面するとき，「クィア神学は何をするのか」を考えてみたいと思います。ひとつの例として「クィア神学は何をするのか」という問いに対し，「キリスト教をクィアする」ことであると答えることができるのではないでしょうか。「クィアする」とは性規範を問うということ。つまりは，パラダイム転換をして発想の転換をしていくべき，ということでもある。自分自身が，「聖書のどこに書いてあるのですか？」と問うているとき，自分が正義になっているんじゃないか？と自省していくこともひとつです。もうひとつは，そういう主張をする人たちを，はっきりと，「同性愛者やトランスジェンダーを排除したいという欲望を持つ人たち」だ，と名指していく必要があると考えています。一昨年（2022年度），に西南学院大学のFD研修でもこのことに言及しました。しかし，ある教員の方が非常に怒られ，「私はそんな欲望を持っているわけではない。聖書に書いてあるんだ」ということをコメント欄に書きこまれました。しかし，実

際には近代以降の概念である「同性愛者」を断罪する根拠を古代の文書に見出そうとすることはかなり乱暴な話です。だからこそ，その人には，たとえ自覚がなくとも，断罪したいという欲望があるのだと名指していくことが必要だと思うのです。なぜ，私が「欲望」と名指すことが必要だと考えているかというと，そもそも「同性愛者である」という表明は，「同性と性行為をする」と意図的に解釈されてきたのではないか。「である」と属性として表明しているのを，「する」と行為の問題にすりかえて解釈している。私はこのような解釈方法を「カミングアウトの解釈のズレ」と分析しています。意図的に解釈されるなかで，「同性愛者である」ということのアイデンティティの表明が，「行為」として受け取られる。つまり「欲望」として読まれている。とすれば，「欲望」として読み取っているのはあなたでしょう！という問い返しが必要なのではないかということです。「同性愛は罪だ」と主張したがる人たちが，先に「欲望」を読み取って，他者にラベリングをしている。だからこそ，その「欲望」をとらえ返して，もう一回，発した側に差し戻してみる，という作業が必要なのではないか。なぜ，同性愛者だけが性的存在とみなされるのか？　という問いを含めて，そう考えています。

同性愛者，トランスジェンダーを排除したい，という「欲望」を持つ人々が主張する聖書の根拠については，すでにたくさんの人たちが述べてきています。具体的に聖書箇所が引用されるときに大きな問題が横たわっているのは，本文が書かれた文脈を捨象しているケースが非常に多い，ということです。キリスト者というのは，文脈を捨象して，聖書を部分引用することが習慣化しています。なぜかというと，日曜日の礼拝ではそういう作業をしているからです。礼拝の説教ではなるべく文脈に差し戻して物事を考えていこうと，私自身はしようとしていますが…。

もう一度，日本の社会の状況に差し戻したときに，文脈を捨象して文言を部分引用する例として，近年，女性議員たちの発言にも例はみられます。たとえば，稲田朋美議員は，７年前，「教育勅語」を持ち出し，「日本が道義国家を目指すべきだという精神を取り戻すべきだ」と，「教育勅語」がつくられ，使われてきた文脈や，文書の中にある他の文言も考えずに，一部分だけ

を取り出して評価して発言しました。三原じゅん子議員は，「八紘一宇とは，日本が建国以来大切にしてきた価値観なのだ」と，植民地主義の歴史も捨象しながら発言しました。先の「同性愛者を排除したい欲望を持つ人たち」も，こういう部分的な引用，意図的な引用と同じことをしているのではないでしょうか。

実際には，いろんな人たちが，それでもなお，排除しようとする「欲望」を持つ人たちと対話をしようとしています。それはとても大切なことだと思います。でも他方で，私達はもう知っているはずです。「ヘイト・スピーチというのは，いくら対話をしても，鳴りやまないのだ」ということを。外国人に対するヘイト・スピーチについて，「あんな極端な断罪など，放っておけばいつかなくなる」と考えていた結果が，外国人へのヘイト・スピーチを激化させることになった，ということも，私達はもう知っています。また，「差別かどうかはまだわからない」ということも，さんざん言われてきたけれども，両論併記というのは解決にはならない，ということも，すでに知っています。なので，対話や架橋を試みる人たちがいることを，もちろん認識しつつですけれども，他方で私達は，「ヘイト・スピーチに向きあう必要はない」ということを断言していく必要もあるのではないでしょうか。

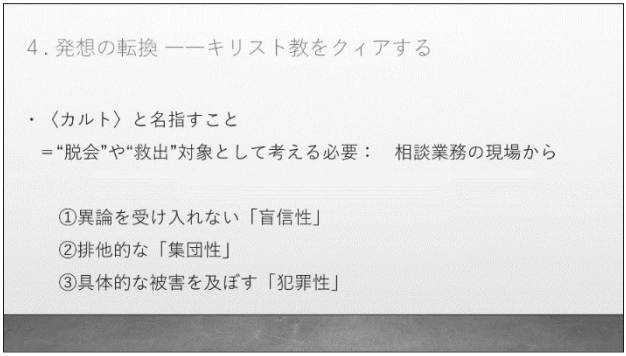
少し韓国の状況に触れておきます。この数日間で大統領による戒厳令が出たり，それが解除されたりで，特にソウルにいる仲間たちのことを想いながら，私は過ごしています。

クィア神学にかんしては，ソウルで（2024年）10月にいろんなことがらが起こりました。ひとつは，大韓監理会（メソジスト教会）の総会が10月にあり，「クィア神学を異端とする」という決議がされたことです。それに先んじて，「同性愛は罪」とするどころか，同性愛者を支持する牧師たちが異端審問にかけられるということが，長老教会（大韓イエス教長老会）でも，メソジスト教会でもありました。メソジスト教会の場合，所属牧師が宗教裁判にかけられて，しかも敗訴して追放されて，3000万ウォン（300万円くらい）の裁判費用を請求されるということが起こったりしています。メソジスト教会のルールに基づいて，です。

10月27日には，「200万人集会」という目標でキリスト教右派の集会が開催されました。性的指向や性自認をもって差別してはならないという文言を含んだ反差別法を通さない，という集会です。嬉々として男性牧師たちが語り，ちょっと不思議なんですけれども，参加者たちが韓国の国旗である太極旗と一緒に，星条旗を嬉々として振っています（韓国のメデイア「NEWS&JOY」のサイトの写真参照）。主催者発表では「100万人」集めた，というのですが，警察発表では23万人の参加でした。ものすごい数です。光化門と汝矣島というふたつの屋外会場を中継してつないでいたということです。これらについては最近書いた文章に少し触れました（「“闘い”の神学をわかちあうこと――クィアするという行為とのつながり」『福音と世界』2025年１月号）。

楽しそうに参加している人たちの表情をみていると，こういう「欲望」を持つ人たちについて，対話の対象ではなく「カルト」としてとらえていく必要があるのではないかと最近考えています。「カルト対策」というパラダイムへと発想や対処方法を転換をしていく必要があるのではないか，ということです。これがふたつめの発想の転換です。

「カルト」は川島賢二さんの定義によると，３つの特徴を備えています。ひとつめに「マイノリティの集団である」ということ。ふたつめに「熱狂的な崇拝行為などを実践している」ということ。そして，みっつめに「かか



わってしまうと違法行為に巻き込まれる，あるいは知らずして人権侵害的な行為を犯してしまう」ということです（島薗進ほか，2023,『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』NHK 出版新書，21頁）。具体的に，「同性愛者を祝福した」とか「性的マイノリティを支持した」ということで，韓国の牧師の友人のいのちがなくなっている，という現実もあります。私は，これは教会が人を殺している現実があるのだ，と受け止めています。だからこそ，危険性を認識するために「カルト」と名指していく必要がある。「カルト」なのだから，脱会とか救出対象として考えていく必要があるということです。相談業務で聞く声の中には，「もう教会から逃げた方がいい」と伝えたくなることが非常に多くあります。

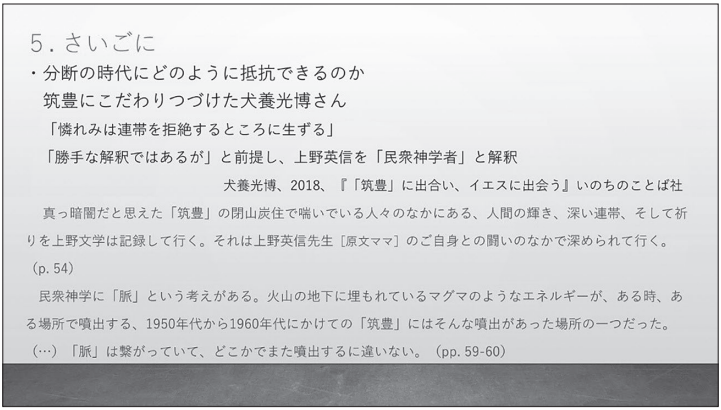
異論を受け付けない信仰とはどういうものなのか，排他的な集団性というのはどういうことなのか。「カルト」だと名指すことで，具体的な被害を及ぼしている人たちの犯罪性を見据えていく必要があると考えています。

ただ，私は教会で幼い頃から育っているわけではないので，このように簡単に言ってしまえるのかもしれません。韓国で同性愛者の支持の運動をしている異性愛者の信徒が，「実は自分はつい数年前まで，同性愛は罪だと思っていた」と教えてくれたことがありました。「ある時に，本を読んだら，「そうではない，聖書にはそんなことは書いていない」ということに気付いた」と。でも，このかたは，一族郎党，牧師とか信者なのですね。父も祖父も牧

師。とてもじゃないけど「『同性愛は罪』だという主張はおかしい」と言えないような場にいるとのことです。対話にもならない，とのことでした。しかし，「教会に行かないということも今の自分にはできない」とおっしゃっていました。そのなかで闘うというのは相当大変だと考えさせられました。「脱会や救出の対象として考えていく」ということをお伝えしましたけれども，そんなに簡単なことではない現場にいる人たちもいるのだということをもお伝えしておきたいと思います。

4．分断の時代に ── アジアと日本の現場での神学の継承と読み直し

分断の時代にいったい何ができるのか。スライドには筑豊で活動してこられた牧師，犬養光博さんの文章を引用しています（犬養光博，2018，『「筑豊」に出合い，イエスに出会う』いのちのことば社）。どうやって，これまで積み重ねられてきた，アジアの，そして日本の現場での神学を継承して読み直していくことができるのか，というのが私自身の課題です。とりわけ，クィア神学がこれまでさまざまに取り組まれてきた闘いを参照してこなかったという反省をこめて，また性的マイノリティの活動も日本では他の人権課題が積み重ねてきた闘いとの連携がなされてきていないという現実を踏まえて，です。いま，どんどん右傾化していく日本の社会と，そして日本の教会



のなかで，神学をどのようにクィアし続けていくことができるのか。抽象的な理論には，つねに具体的な文脈があるはずです。日本語的な意味での「憐れみ」── パターナルな個人化 ── ではなくて，聖書的な意味での「憐れみ」，つまり，はらわたが突き動かされるような経験と向き合いながら，聖書に描かれていることがらの回復をどのように目指していくのか。

宣伝もかねてしまって恐縮ですが，（2025年）２月に「在日・日・韓　女性神学フォーラム」を大阪・生野で開催します。このフォーラムでいったんは通訳を引き受けた方が途中降板するという事件がありました。理由は教会が克服すべき課題として同性愛嫌悪をあげたからだったようです。「同性愛は罪である」という信仰的な理由だということだったのです。これは公になっていないのですが，きちんと公的に語っていく必要があると思っています。かかわった人たちは隠す。だから，どんどん，どんどんと同性愛嫌悪は広がっていく。隠蔽しようとする人たちも，同性愛嫌悪の加担者にすぎないのではないでしょうか。

これをちゃんと問題化していこうと伝えていくなかで，善意からでしょうけれども，今回の女性神学フォーラムで「堀江有里さんが傷つくかもしれないから，もし傷つくことがあるようだったら私たちは全力で守ろうと思う」と伝えてくれた人がいました。皆さんはどう思われますか。善意の発言をあえてここで取り上げて批判するのはふさわしくないかもしれないのですが。私は，「守ってなんて欲しくない」と思ったのです。必要なのは「一緒に闘うひと」です。「守る」という発想自体が，異性愛主義や同性愛嫌悪の問題を，個人の問題としてしまうのではないでしょうか。そうではなくて，構造の問題であり，場の問題であるというところに，もう一回戻して，考えていく必要があるのではないか，と思っています。

まとまりのない発題になってしまいましたが，以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

応答１：　藤方　玲衣 さん

ご紹介にあずかりました，藤方玲衣と申します。

冒頭にも紹介していただいたように，わたくしは，この西南学院大学の神学部に赴任したてのほやほやなのですけれども，旧約聖書学つまりヘブライ語聖書学が主な研究領域ということで，色々教えております。堀江さんと工藤さんは以前から少し知っているのですけれども…。私は，聖書学の立場から応答したいなと思っています。

私は，ヨブ記との出会いから，ヘブライ語聖書学の魅力に取りつかれた人間なのですが…。「クィア神学」神学に出会って ── じつは，工藤さんを通してなのですが ──，とてもびっくりしました。私が聖書学をやっているなかで，聖書から読み取ったいろいろなうねりとか力とかそういうものを，まさにその「クィア神学」というものが言語化してくれていた，と私は思ったのです。「クィア神学とは何か」ではなくて，本日のタイトルのように「クィア神学は何をするのか」という問いの立て方についてもまた，かなり驚きました。まさに，ヘブライ語聖書が物語ろうとしていること，関心を持っているのは，まさに，「神とは何か」ではないのです。「神は何をするのか」「神は私達に何をしてくれるのか」「神はどう行為するのか」なのですね ── 私が勝手にいっていることではなくて，基本的な旧約の事典に載っているのですが ──。だから，旧約聖書は「物語」なのですね。哲学書でもないし，神学書でもない。聖書学においてほぼ合意を得ていることですが，旧約聖書から一貫した神学とか思想とか教義とかを読み取るということは，もう無理だと言われております。これは聖書学のおおかたの合意です。聖書学をやっていると，そうだよなとしか思わないのですけれども…。

聖書は「物語」という形式をとっていますよね。だから，「福音書」は４種類あります。そのなかのイエスの描き方はずれているし，世界観，人間観もずれています。一貫した思想を語ることとか，ルールとして何かを語ることとか，神を定義するとか，そういうことでは捉えられない，そこを超えていく何か…。そういうものについて一生懸命不完全な人間の言葉で物語ろう

としている…。そういう営みにあふれているのが聖書の物語であると，私は考えています。聖書は多種多様な物語の宝庫であって，何かを構築して私たちに教えこもうとしている書物では一切ない，と，聖書を研究しているなかである意味…考えざるを得ませんでした。

ですから，（聖書は）何かひとつの正しい思想というものを主張するということは一切していない。聖書を読んでいると，そんなことは一切考えられないですね。ただただ響いてくるのは，多様な立場からの声です。ほんとうにたくさんの立場がある。ひとつのことがらに対しても…。例えば，「王権」というものが良いのか悪いのかについて，聖書のなかには正反対の立場がある。「王とは良いものだ」という立場もある。しかし「王権のせいで私たちはあまりいい思いをしなかった」ということも書かれてある。それぞれの立場からいろんなことを書いている。そして，根本的に，「人間の生と死」というようなことについても，色んな立場がある。「ダニエル書」には「復活がある」ということが書いてあるけれども，「コヘレトの言葉」は「死んだら土に返ってそのままだ」と。じゃあどっちなんだ？　どっちなんだよ？　と読者が考えるしかない。人間は「神の似姿」なのかそれとも「土くれ」からできたものなのか。どっちも書いてある。多様な立場から，神や人間や世界について物語られている。手に負えないわけです…本当に。そして，そのような物語が全て神を指し示そうとしている。じゃあ，神とは何なのか？　これはもう，何なのかって，わからないわけですよね。だから，私たちが神とどういう関係を持っているのか？　神は私たちに何をしてくれたのか，ということをひとりひとりが生きている文脈のなかで語らざるを得ない。それしかできない…神について語ろうとするときは。そういう側面が，聖書の物語にはとても鮮やかに現れていると私は思っています。

ですから，本当に驚きました。クィア神学の様々な本を読んでいて…。聖書が言っていることが，違う種類のことばで言語化されていると思って，驚愕したわけです。ヘブライ語聖書の「ヘブライ」という言葉は，ある社会階層を表すことばだとも言われています。今でいうと ── 難民とか避難民とか ──，既存の社会からはみ出て生きざるを得なかった ── まさに周縁化さ

れた ── そういうひとたちがたねになってできたイスラエルが，聖書の物語を語っていったわけです。だからそこにはとてもラディカルな倫理思想だとか，独自の法が形成されてきた。

そして，聖書の物語には，繰り返し繰り返し「さすらう」とか「旅人」というモチーフがあります。ユダヤの伝統思想でもそれは「追放」という概念になっていますが…。人間というものはひとところの土地を所有したり，ひとつの権力構造のなかに安住したりできずにつねにさすらうものなのだ，という思想が本当に強く響いています。アブラハムの物語にもヤコブの物語にもモーセの物語にも…。

聖書の物語には，それぞれの個々の文脈が存在しています。なぜその物語が書かれたか，という歴史的社会的な文脈というものがある。それを理解するということがほんとうに重要だと思っています。それが聖書研究の意義であると思います。個別具体的な現実を生きたいのちの物語であるということを決して忘れてはならない。現実を生きたいのちがまず存在していて，そのいのちが語った「神の言葉」であるということです。文脈から切り離された「神の言葉」は本当に暴力性を持ちます。人を縛ります。人間のいのちから切り離されているわけですから。規範とか抑圧に容易に転じるわけですね。

聖書が「聖書」として私たちに手渡されていることの意義を考えるべきだと思っています。「聖書」は切り離されたものではないのですよね，当たり前ですけれど。「聖書の一部」ではない。「聖書」はトータルで「聖書」なのです。物語の群れ，矛盾の塊，カオスという言い方もされたことがあるのですが…。その「聖書」がまるごと私たちに手渡されていることを，私たちは真摯に受けとめていかなければならないと思います。

聖書の物語は手に負えないです。人間が捕まえようとしても，人間の様々な規範だとか神学だとかそういった構築物で囲おうとしても，本当に手に負えない…。物語の集合体という形式で，聖書は神を指し示しているのではないかと，私は時折思います。もし，神が，人間のことばでとらえられるものであれば，神というものは，人間の構築物を支えるある種の道具になりますよね。人間の権威や規範を裏付けるだけの存在になる。私たちが信じている

のは，そういう神なのか？　ということを常に問うていく必要がある…。それが明確に示されているのが聖書であり，聖書の「物語」に立ち返っていくことがキリスト教にとっては非常に大切なことだと思います。聖書そのものが非常にクィアな姿を示していると，私は考えざるを得ないところがあります。

本当に私はびっくりしています。聖書学を通して見えてきた聖書の姿と，クィア理論が指し示す視座がこんなにも重なり合うものなのかということに，です。その驚きとともに，今回のシンポジウムにおいて応答させていただいたことを非常に嬉しく思います。

応答２：　広木　　愛 さん

私の応答は，教会の現場から，ということで，最初はお話を頂きました。

私が福岡に来たのはこの４月ですので，教会の現場と言ってもこの福岡での数か月しかないですけれども，自分自身が教会で育ったという経験なども含めて考えていけたらなと思いました。

私の自己紹介のところでもありましたが…。西南の（インクルーシブ＆エクイティ）推進宣言にも「よきサマリア人」のところが書かれていますが，ここに出てくる「宿屋」が教会であると私は思っています。ここで「全てを受け入れる」という単語が使われていることから，それが教会だったらいいな，神の国だったら良いな，という想いから聖書を読むようになったのですけれども…。実際に教会に行ってみると，礼拝に行ってみると，そこにいない人たち，いていいけれどもいない人たちがいる。たまたまいないかもしれないけれども，私たちが排除していて受け入れていない人たちがいるなあ，ということ…。もしくは，いたけれどもいなくなった人たちもいるなあという。それは教会がこれまで，教会の信仰告白や伝統的な聖書の読み方でもって排除してきた…。つまりたとえば，今日紹介されたような色んな日本の文化や聖書の読み方で，自然と見えないかたちで排除されてきた人たちがいる

な，ということ…。そしてそのことに気付かずに，教会で育ったら仕方がないという…それが文化として自分のからだのなかに入り込んでいるなかで，「当たり前」に慣れていた自分がいるということを改めてもう一度思わされました。けれども教会がこれまでに大切にしてきた文化のようなものは，2000年間培われてきたもので，簡単には壊せないけれども…。けれども，なにか変わりたいと思っている…。でも，そこで育った私は，たとえば「牧師は男性だ」と思い込んでいる。私自身も男性牧師しか見ずに育っているので，女性が牧師になるというイメージさえ無い。そのようななかで，教会とは何かをもう一回読み解いていくという挑戦のようなものには，自分自身惹かれるところがあって…。新しい読みかた，新しい共同体を見つけていきたいな，と思いながらも，なかなか固定されたものから脱し得ない部分があるな，とちょうど思っていました。

「クィア」というものが，今まで固定化されたものを崩して新しく問い直すということは，とても素敵だな，と思う反面，固定化されているからこそ教会が共同体として楽にいられる，ということもあるのじゃないかな，と思いました。つまり，「クィアをする」ということは，考え続けなければいけない。言葉化し続けなければいけない…。それが固定化してしまうと「クィア」の意味がなくなる，としたときに，果たして教会はどっちに行きたいかな…？　と。そのときには，「変わりたい」「言葉化したい」「新しい言葉を掴みたい」と思っても，それが一年たって二年経ったら，「これでいいや」と易きに流れるということがあるな，と思わされました。

そして今の教会が，高齢化 ── 教会だけでなくどこでもですが ── しているなかで，果たして「言葉化」し続けることができるのか？　その体力が教会に残っているのか？　「考える」という文化を，教会が持ち直すことができるのか？　とっても大きな挑戦だと思わされています。同時に ──「クィア」とは関係ないですけれども ──，今まで一緒にいた人たちが自分の性的な課題とか，自分の過去がこうだ，と言った時に，（それを受けて）「マイノリティを勉強しなきゃ」と急に…。目の前にいた人たちが突然「神学」という言葉で変に対象化されていくということがあります。いままで仲良しで，

挨拶をしていたような人たちが急に，特別な人に変わっていく，という経験をこの何年かでしてきました。果たして，神学は必要なのか？　…「マイノリティの神学」が必要だと言われるなかで，神学することで人を対象化してしまうというか，「教科書の一例」としてしまうような感じがあります…。その人をそのひととして受け入れるだけではいけないのか，と思っていました。その人たちがもう一度いのちにつながるためには言葉がある方がエンパワメントされる，けれども反面，言葉化されていくときに縛られていく，人がモノ化されていくということがあります。この両方のきわきわのところに今いるという感じがあります。神学するということと，教会でみんなで一緒にいるということ…。どのように，人がひととしていきていくことができるのか？　聖書から何をもらっていけるのか？　難しいなと改めて思わされました。

文脈で切り取って語ってしまうということを教会はしてきたけれども ――それが教会の文化なのかはわかりませんが ――，教会が慣れていることであると思います。文脈で読み取ることの大変さと，共同体としての強さと弱さの両方を，「クィア神学」の視点はあぶり出してきたのかな，と思います。教会の信仰告白や，ミッションステートメントなどが，固定化されない，動的なものとしてどうやって用いられていくのか，それがクィアの視点でどのように豊かになっていくのかに興味がありますが，この挑戦はとても簡単なことじゃないな，と思わされました。

色々もっと聞きたいなと思うところもありますが…。「言葉化するヒント」を頂いたと思って，これからも考えていきたいなと思います。

質疑応答　　**工藤万里江** さん

たくさんご質問を頂いて，本当に有難うございます。一個ずつ答えていたら２時間くらいかかるのですが，ひとつだけ良いでしょうか。…部分的になってしまうのですが，よく聞かれる問いを出してくださったかたがいるの

で，これに答えます。

「リードが，キリスト教の体系を相対化する意図はわかるが，なぜ，なお，イエスや神にこだわるのか？　無神論になってもよいのではないか？」という，ごもっともな問いかけを頂きました。

これは良く言われるし，私自身もずっと考えていることです。キリスト教を相対化していく，神学を揺るがしていく，というときに，内部からそれを揺るがすのですよね，格好いいですよね。とか私などは言ってしまうのですが…。なぜわざわざ内部にい続ける必要があるのか？　と当然言われるわけですよね。なんならもう，キリスト教という枠自体を無くしてしまう無神論であったり，キリスト教とは呼べないものじゃないかと言われます。私も，その問いはもっともだと思います。私自身は，アルトハウス＝リードでもないし，第二の方向性を採る他の神学者でもないので，その代表として言うことはできないのですけれども…。クィア神学がなぜ，なお神学なのか？　という問いに対しては，いくつか答えはありうると思うのですね。私自身のいまのところの仮説は，第一に ── 特にアルトハウス・リードのような方向性をとる人たちにとって ──，キリスト教というものが，その社会そのものの基礎をかたち作っていて，そこから離れるという選択肢が端的にない，という文脈があり得るということです。たとえば，ラテンアメリカなどの文脈において，抑圧的な性規範というものに取り組もうと思ったら，おそらく，その根底にあるキリスト教に取り組まざるを得ないのですね。なので，そういう人たちに対して，「嫌ならキリスト教からでていけばいいじゃないか」というのは，「嫌ならその社会から出ていけばいいじゃないか」というのと同じくらい不可能なことである，ということです。つまり，嫌でもそれに取り組まざるを得ない文脈がある，ということです。もうひとつは，より抵抗的な理由です。彼女が「神学」を名乗り続けることのノイズ性って凄い強烈なものがあると私は思っているのですよ。それは，キリスト教の保守的な人たちにとっていちばん気持ちが悪くていちばん嫌なことです。つまり，外側にもう出てしまった ── そうしたフェミニストの人やクィアの人もたくさんいます，もちろん ── そういう人たちから何を批判されても，それはキリスト

教内部の言説ではないので，無視できるわけですね。だけど，それを「クリスチャン」として「キリスト者」として「神学」として発信される，ということは，非常に嫌なことだろうと思うし，その意味で，抵抗としては非常に有効なのではないか，と私は思っているので。二番目の理由としては，あえて内部に留まり続けて，神やキリスト，マリアのことを，下品な言葉で，みだらな言葉で語ることによって，眉を顰められることそのものに非常に重要な機能を見出しているのではないかと考えます。…私の仮説ではありますが。

閉会の挨拶

司会　才藤千津子 さん

本日のシンポジウムでは，ある種危機的ともいえる世界のなかで，神学，あるいは現在の教会の有りかたにかんして，私たちが生きる社会，神学，教会のなかで，鋭い問いかけをするということがなされました。私たちそれぞれが，自分のなかに起こってきた問いや思いを，これから大切にしていきたい…。そのように願いまして，この会を終わらせていただきたいと思います。本日はどうも有難うございました。

当日会場参加者からの質問

（文意に変更がない程度に表現を改めたものがある）

〈全般〉

- 日本の神学研究者の中で，クィア神学研究をしている人は多いですか？やはり　マイノリティでしょうか…？　私はカトリック信徒ですが，教会の社会運動が弱体化している気がしています。クィア神学がまだメインストリームにないことと関わっていますか？
- クィア神学の理論的背景に「ポストモダニズム」があるが，それは「真理が存在しないという真理」を言っているものであり，そのことは客観性，普遍性を否定してしまい，結果として，例えば自民族中心主義に基づいた排外主義への基礎を与えてしまうという意味で，クィア神学がポストモダ

ニズムに依拠しているということは，現在の排外主義あるいは人がある種の共通基礎を有してしまうのではないかと思います。

- 「クィア」に「神学」するという営みの中で陥りがちなのは，上品に事を片付けようとすることではないでしょうか？　「性行為」をしないという限定付きで同性愛を認める，という人は，一見 SOGI などに理解があると見える人の中で多いように思います。「下品／不適切」な神学をする，という視点から，同性愛という事柄を「同性と SEX をしたいという思い」として捉え，その言葉を使っていくべきではないかと思います。バトラーが積極的に自身の SEX について語っているような所に，クィア「神学」そのものの乗りこえるべき壁があるのではないかと思いました。
- ちょうど，韓国の論集クィアドロジーの邦訳が出たので読んでいますが，お二人は K-POP 好きですか？　好きならアーティスト名と楽曲名を教えてください。
- 「虎に翼」への評価は？

〈工藤万里江さん　宛〉

- リードがキリスト教の体系を相対化する意図は分かるが，なぜ尚，イエスや神にこだわるのか？　無神論になっても良いのではないか？　そもそも，リードが描くイエスは，どのように知ることができるのか？　19世紀の自由主義神学の「イエス伝」のように，人間の思想・願望を投影するものにならないか？　しかし，大きなところで，これまでのキリスト教・神学の在り方を，クィア，フェミニズムによって揺さぶり，問い直すことは，大切なことだと思う。差別性は克服されねばならない。
- マイノリティ間の分断。女性と LGBTQ，またレズビアンとトランスの間などで起こっている。方向性①と方向性②は，また分断というものになってしまうものなのか？
- 「ノイズ」は「揺るがし」「問い」と言いかえられていましたが，それらをふくみながら，そこには完全にフィットしないから「ノイズ」と表現されているのだと思います。これは，方向性②において最も重要な要素だと思

われます。もう少しこのことば・概念についてききたいです。

- 「神がたり」が「神学」に対抗するものとして提示されていました。これも，どういうことなのかもう少しききたいです。具体例などあればそれもおききしたいと思います。
- 日本のマイノリティー，抑圧されている少数者と連帯しようとしている「運動」に，しばしば家父長制的なパターナリズムがあり，「天皇」がいる現実があります。クィアな発言・行動がこれを崩していく可能性があるでしょうか？
- ご講演有難うございました。ご著書でも紹介されていましたが，アルトハウス＝リードのように，イエスの無謬性を前提としないで，イエスの限界を指摘するとき，イエス自身はどのように応答するのか？　と考えました。具体例として，「長血を患う女」の話がありますが，かりにイエスが「生理の血は律法によって規制すべきものである」という規範に沿った男性中心主義的対応をしたとき，「流れる血を止めるな」「止めるべきは律法の男性中心的な規範だ」と長血の女性や周りの人々が声をあげたとしたら，イエスはどのように答えるだろうか？　と想像しています。その指摘を受け入れて行動を変えるのか，それは無視されるのか…　お考えがあればお聞かせ下さい。

〈堀江有里さん　宛〉

- 「場の問題」についてもう少しききたいです。
- 天皇制は「理想の家族」像を模範として示し続けて，異性愛主義の国家的なプロパガンダとなっています。これをクィアするにはどうしたら良いでしょうか？
- 〔レジュメ〕p.2「女性の不可視性（性の多様性への“過剰な”配慮と統計の問題）」についてもう少しくわしく教えて下さい。
- 分断の時代への抵抗として個を確立するという方法をとった場合，共同性の可能性はどのように開かれますか？　それは個人同士の連携という形に限られるでしょうか？

オンライン参加者からの応答

（抜粋，文意に変更がない程度に表現を改めたものがある）

- ご講演ありがとうございました。クイア神学は何をするのか，異性愛主義のみならず，自死や，中絶，離婚，再婚，繁栄の神学等々，保守的な教会に対するアンチテーゼとなる良いテーマと思いました。
- 本日はありがとうございました。応答をお聞きしていて，聖書は物語である，というのは，別にクィアなことではないと思います。神，カノン，教会，共同体の転覆的神学の営為について語られたのに，応答が従前的なため，それに対する応答にさらに応答者が答えてほしかったです。
- シンポジウムを公開して下さり感謝します。参加することが出来て大変感謝します。
- 共同体を守ろうとするから，クィアできない。という言葉は，実に刺激的でした。
- 自分が学んできた「神学」よりもっと「学問」は進んでいるのだと気付かされました。知らずのうちに自分のなかに固定された概念ができていて差別やヘイトに反しながらも自分の枠組みのなかで聖書を読んでいるにすぎないのだと気付かされ唖然としました。クィアの動的なものと聖書の親和性も学びました。
- シンプルな面と，複雑多様な面を学ばせていただきました。
- 工藤先生の話でクィア神学について分かりました。ありがとうございます。ある米国の番組で福音派牧師が百人隊長のくだりでギリシャ語では部下ではなく恋人だと話をされてました。神学の話がメインですがやはりキリスト者にとって聖書は信仰の基本なので解釈等に触れていただけると助かります。
- これから聖書から聞き，教会として生き，働き生きて行くにあたってよい問と示唆を受けました。ありがとうございました。
- ある「コミュニティ（「キリスト教の」という意味ではなく，人々の集まりという意味です。）」が，あるひとにとって，アイデンティティや生活や人生というものに排除できないほど大きな部分を占有してしまっている構

造が，そもそもの構造的な欠陥ではないのだろうか？　と感じました。

- 非常に勉強になり，アクチュアルな議論で，とても勇気をもらいました。自分もだれかとともに闘うことができるようになりたいと実感させられました。
- ありがとうございました。工藤先生と堀江先生の教えてくださったことに改めてそして大いに新しく驚き，もっと学びたいと思いました。藤方先生の応答にワクワクし，広木先生の応答には大変共感しました。
- クイア神学，そしてそれが何をするのかが学べて良かった。今後は神学と教会現場の折り合い（共生）が課題になると思います。御企画ありがとうございました。
- 大変刺激を受けた発題でしたが，時間が短く，お二人が半分ずつの時間しかなかったのがもったいなく思いました。応答でもっと自由な発言が取り上げられるとよかったです。
- クィア神学が何をもたらそうとしているのか，大きな流れをつかむことができました。ありがとうございます。
- 学びに貴重でよい集会でした。また，次の機会を望んでいます。ありがとうございました。
- 途中からしか参加できず残念でした。それぞれの方と主催者に感謝します。問われ続け，まなび続けたいと思いました。
- キリスト教が地盤ではない日本で「クィア神学」をすることの意義や大切さを自分自身でも問うていきたいと思いました（私はクィア聖書注解の翻訳プロジェクトの初期からのメンバーでもあるので）。障がい者の神学（クリップの神学）と合わせたクィア-クリップの神学のシンポジウムもして欲しいです。

※本稿は，当該シンポジウムの録画映像を基に文字起こしをした原稿を基に，各発言者に監修を求めて作成した。文字起こし及び編集作業については藤方玲衣が担当した。関係者各位の協力に心より感謝する。